

第13講 「受動分詞」と「完了分詞」

「動詞」の「活用」の「第3番目」として、「～e d」というものがありまして、また「不規則変化」というのがあることもご存知でしょう

一般的には、「過去分詞」と呼ばれています

しかし、「過去分詞」と呼ばれているのに、過去の意味はありません

「過去分詞」という用語は、「b e (助) 動詞＋過去分詞＋b y～」というような、「受動態」をあらわすとかいう、「眉唾物的な公式」で知られていますね

ここでも、「受動態」＝「b e 動詞＋過去分詞＋b y～」と固定化されているうえ、「b e 動詞」は「助動詞」で「過去分詞」が「動詞」と「論理破綻」となっておりますが、そんな「現象」の追っかけ羅列や「論理思考停止！終了」でいいのでしょうか

《「動詞」に「～e d」という「活用」があり、「～される」という「受動状態」もあらわし、「形容詞化」と「副詞化」はされるが、「名詞化」はされない》というだけのことです（同じ形態ながら、「過去形」は「動詞」扱い、「受動分詞」「完了分詞」は「形容詞」と扱われます）

そして、「形容詞化」した場合は、①「名詞修飾」②「形容補役」で使われるというだけのことです

本書では、その本質的意味から、「受動分詞」と呼ばせていただきます

「以上です」といいたいところですし、みなさんも、「もう結構」とお思いになっているかもしれませんが、ここでも「屋上屋を架」させていただきます

そもそも、「受動態」とは何なんでしょうか

あくまでも「動作」であり「消極的動作」とも呼ばれるべきものであるという哲学的な考え方もあるようですが、単なる「文法論理」を組み立てるにあたって、「宇宙観」「世界観」「人生観」を語る「哲学」的概念を持ち込む必要があるでしょうか

誰かが他人に殺されて遺体となって、「消極的動作」だと一般的に考えるのでしょうか

「殺される」のは「消極的動作」だと考えて、「有用」なのでしょうか

「殺された」「状態」だと考えるのが常識的ではないでしょうか

「a killed man」は、「名詞修飾」の「形容詞」として認められているのですから、(「動詞」が活用されれば「品詞の転換」が起きるのです) だったら・・・

「He was killed.」が「動作」なんて思う人がいるのでしょうか

「～された」という「状態」をあらわす「形容補役」と考えるべきでしょう

そして、重要な展開的観点ですが、「動詞」のいち「活用形」たる「～e d」形は、「受動分詞」として「受動状態」をあらわし、「状态的」「結果的」になります
「状态的・結果的」意味は「完了的」意味合いをも当然伴い、「受動態」と「完了態」で同じ「～e d」形が使われるようになったと考えるべきではないでしょうか

「過去形」も「状态的感覚」が強く同じ活用形なのかもしれませんが、「動詞」の地位を保っています（要検討）

「受動態」と「完了態」が同じ「活用」であるといっても（例えば、日本語の「れる・られる」のようなものだと考えられます）、「過去分詞」というような実体を示さない名称よりは、それぞれ「受動分詞」「完了分詞」と呼ぶべきものと考えます

では、本論に入り、「受動態」とは、実体的に見れば、「主体・主役」と「目的役」との「立場・視点を変えた描写」です

ここで、「自動詞」と「他動詞」の違いを再考してみてください

「他動詞」には「目的役」があるので「受動態」になれますが、「自動詞」には「目的役」がありませんので、原則的には、「受動態」にはなれません（「群他動詞」の場合は「受動態」になれます→本講にて後述）

「自動詞」の「～e d」形は「完了態」であり、
「他動詞」の「～e d」形は「受動態」か「完了態」なのです

「受動分詞」を「形容詞」としてあらたなる『文。』に「転用」する場合、「自動詞」＋「～e d」となり、「自動詞」は「b e 動詞」と「一般の自動詞」ですが、「完了態」の場合は特に「h a v e ・ h a s ・ h a d」という「自動詞」が使われます
この「形式的」な「自動詞」の使い分けによって、一応、「受動態」と「完了態」が区別されます（「h a s」が「助動詞」なんて言うなら、「c a n s」を提示してください）

ただ、≪「b e 動詞」＋「自動詞の完了分詞」（「b e g o n e」）≫という「過渡期的形態」があることは、「受動分詞」や「完了分詞」が「根源同一」の「形容詞」であることの歴史的・無意識的なあらわれではないでしょうか

単独の「自動詞」の「～e d」形を使う場合は、「完了分詞」しかありません（「目的役」がないので「受動態」はありません）

「a d e v e l o p e d c o u n t r y」（「発展してしまった国」→「先進国」）が好例です（a d v a n c e d, m a r r i e d, c l o s e d 参照）

ちなみに、「a d e v e l o p i n g c o u n t r y」は「発展しつつある国」→「発展途上国」です

★ここから先は読み流しにしましょう

受動分詞のまとめ

受動分詞	用法	役割
	名詞的用法はありませんが、「the + 受動分詞」で「～された人々」となる	「the accused」等が「主目補」になる
	形容詞的用法	①名詞修飾 ②補役（いわゆる受動態）
	副詞的用法	場面状況の設定（役外状況族） （分詞構文）

自動詞	完了分詞
他動詞	受動分詞
	完了分詞

・・・ 本講の、ここから先は、はじめのうちは、飛ばすか流すかしてください
「受動分詞」の「形容詞的用法」をみておきましょう

①「受動分詞」の「名詞修飾」の場合

『文。』から「形容詞化」されれば、「目的役」「補役」「副詞」等を伴う複数の語のまとまりですから、「名詞」の後に置かれるのが原則です

ただし、「受動分詞」「完了分詞」1語の場合は、「名詞」の前に置かれます

①. 「自動詞」の「受動分詞」の「名詞修飾」の場合

「完了的」なものしかありません

②. 「他動詞」の「受動分詞」の「名詞修飾」の場合

「a broken window」（割られた窓）

「a window broken by the storm」（嵐で割られた窓）

「受動分詞」が「名詞を修飾」していますので、略して、「受分名修」です

㊦ 「受動分詞」の「形容補役」の場合

③. 「自動詞」の「受動分詞」の「形容補役」の場合

本来、「完了的」なものしかありませんが、
「群他動詞」という考え方の下に「受動態」が可能です

They laughed at him .
群他動詞

« 「自動詞」 + 「前置詞」 »を「他動詞」とみなして「受動態」にするのです

He was laughed at by them .
自 群他動詞の受動分詞（「補役」）

④. 「他動詞」の「受動分詞」の「形容補役」の場合

The window was broken by him.
自 他動詞の受動分詞
形容補語 （略して、「受分形補」）

完了分詞のまとめ

	用 法	役 割
完了分詞	名詞的用法はありませんが、 「the + 完了分詞」で 「~してしまった人々」となる	「the learned」 「the deceased」等が 「主目補」になる
	形容詞的用法	①名詞修飾 ②「自動詞have」の 「補役」となる
	副詞的用法	場面状況の設定 (役外状況族) (完了的な分詞構文)

自動詞	完了分詞
他動詞	受動分詞
	完了分詞

「完了分詞」の「形容詞的用法」をみておきましょう

㉔ 「完了分詞」の「名詞修飾」の場合

⑤ 「自動詞」の「完了分詞」の「名詞修飾」の場合

「完了的」しかありません

「a escaped man」(逃げ出してしまった男)

「a country developed in 19th century」も可能です

「完了分詞」が「名詞を修飾」していますので、略して、「完分名修」です

⑥ 「他動詞」の「完了分詞」の「名詞修飾」の場合

「受動的」なものしか見当たりません(「受動的」な修飾に収束してしまうのでしょうか)

㉕ 「完了分詞」の「形容補役」の場合

⑦ 「自動詞」の「完了分詞」の「形容補役」の場合

He has arrived in Okinawa.

自

自動詞の完了分詞

形容補語

(略して、「完分形補」)

⑧ 「他動詞」の「完了分詞」の「形容補役」の場合

He has finished the work.

自

他動詞の完了分詞

形容補語

(略して、「完分形補」)

ちょっと面倒でしたかね

ここは、あんまり難しく考えないでください

★印からの「受動分詞」のまとめや「完了分詞」のまとめ以降は、飛ばしてあとからゆっくりやってください(本講のはじめの2ページだけしっかり理解してください)

次講は、「動詞」の「活用・転換・転用」の学習の最後になります

従来、「分詞構文」と呼ばれている、「能動分詞」と「受動分詞」の「副詞的用法」、すなわち「活用準副節」と呼ばれるべきものを見ていきましょう

補足 < the + 分詞 >

- ① 「the + 能動分詞 (～ing)」 ⇒ 「～しつつある人々 (物事)」
- ② 「the + 受動分詞 (～ed)」 ⇒ 「～された人々 (物事)」
- ③ 「the + 完了分詞 (～ed)」 ⇒ 「～してしまった人々 (物事)」

以上のような公式がありますが、「分詞」のあとに「people」「thing」等の省略と考えた場合、「people」「thing」の残滓を強く考えれば「形容詞」と考えられますが、「people」「thing」を無きものと考えれば「分詞」の「名詞化」と考えられます

- ① 「the dying」 ⇒ 死にかけている人 (々) → 瀕死の人 (々)
- ② 「the accused」 ⇒ 訴えられた人 (々) → 被告人
「the unexpected」 ⇒ 予期せぬ出来事
- ③ 「the deceased」 ⇒ 亡くなった人 (々) → 故人
「the learned」 ⇒ 学んだ人 (々) → 学者

補足 << 受動態の考察 >>

「受動態」文法的実体はどういうものでしょうか
それは、「受動分詞」を利用した『文。』の「受動転換的形容詞化」のなのです
「能動分詞」のような単なる「形容詞化」ではなく、「主目」転換を伴った「形容詞化」です（「副詞化」も同様ですが、以下省略して説明します）
そして、『文。』の「形容詞化」の一種なのですから、元の『文。』の「構成要素」や「副詞系」を従えているのです（これは、「『文。』の名詞化」や「『文。』の副詞化」と同様ですね）
ここでの注意は、元の『文。』の「目的語」を中心に据える転換ですから、元の『文。』の主体は表舞台からは降りて、後方支援にまわっているのです（「副詞」化）
その結果、元の主体を表したい場合は、「by + 目的格」となり（「副句」ゆえに省略されやすい）、元「補語」・元「副詞」のようには必須的には残存することはないのです